

特別支援教育に携わる教師の専門性を向上させ、担保するための実践的研究

－特別支援学校教師との比較から考える専門性向上パッケージの提案－

教育学研究科 教育実践創成専攻 教育実践開発コース 教師力育成分野 武井恒

1. 問題と目的

(1) 研究の目的

本研究は、2年計画の2年目である。2年間の研究を通して、教職経験年数や学校種を問わず、特別な支援を必要とする児童や生徒への一定の指導や支援ができる、教師のための関わり方のヒントになる資料やプログラム（以下、専門性向上パッケージ）を作成することを目的とした。

昨年度は、特別支援学級教師に焦点を当て、専門性の向上と担保について考察した。2年目である本年度は、特別支援学校の教師を対象として研究を行い、サポートシートを含めたパッケージの完成と提案を目指した。さらに、特別支援学級担任と特別支援学校担任のサポートシートの記入状況の違いを分析し、両者の状況を総括した。

(2) 目的設定の背景

i. 特別支援教育を必要とする児童生徒数の増加

文部科学省（2019）によると、図1のように日本における特別支援教育を必要とする児童・生徒数は増加傾向にある。とりわけ小中学校での増加が顕著である。

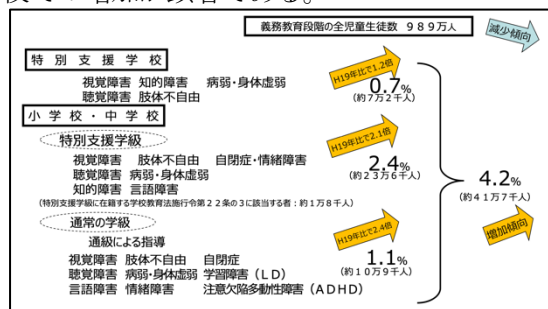


図1 日本の特別支援教育の現状について

山梨県教育委員会（2020）によると、令和元年5月1日現在で、通常学級では3239人（通級による指導を利用している児童・生徒を除いた人数）の児童・生徒が何らかの特別な支援が必要であると示されている。また、山梨県教育委員会（2021）によると、令和3年5月1日現在で、特別支援学級については小学校に410学級、中学校に178学級、計588学級が設置され、1968人の児童・生徒が在籍している現状である。

このように、山梨県における特別支援教育を取り巻く背景に目を向けると、特別支援学級や通常学級に特別支援教育を必要とする児童・生徒が増えている現状がある。だからこそ、あらゆる教師に特別支援教育の専門性が求められる。

ii. 求められる専門性

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（中教審第228号）の中で、「新時代の特別支援教育の在り方について」に関し、複数の観点でまとめられている。特に注目したいのは、「特別支援教育を担う教師の専門性の向上」である。特別支援教育を担う教師として、特別支援学校の教師や特別支援学級、通級による指導を担当する教師に特別支援教育の専門性が求められるのは当然である。しかし、それだけではない。全ての教師に求められる特別支援教育に関する専門性として、「障害特性に関する理解や特別支援教育に関する基礎的な知識、個に応じた分かりやすい指導内容や指導

方法の工夫の検討」が明記されている。すなわち、通常学級を担当する教師であっても、特別支援教育の専門性は必須となる。

山梨県教育委員会（2020）では、「専門性の向上」、「特別支援教育の充実」、「特別支援学校と他校種との人事交流の促進」が特別支援教育の中での課題として挙げられている。また、竹林地（2014, 75）は、「特別支援学級担任者の専門性の向上については、過去、たびたび提言等がなされてきたが、専門性を担保する効果的な教育行政施策の実施には至っていないと思われる」と述べている。日野ら（2019, 92）も、「特別支援教育担当教員の専門性を高めることが、今後の特別支援教育の充実を図る上で、さらに重要になってくると考えられる」と述べている。

以上のことから専門性や指導力の向上は、特別支援教育に携わる教職員に求められる基本的かつ重要な課題であると考えられる。

また専門性の向上とともに、それを担保する仕組みづくりも大切である。多様化する実態に対応するために、教職員には専門性が求められる。筆者の所属する特別支援学校では100名以上の教職員が在籍するが、教職員歴に差があっても、各々の教師は一定の知識・技能が求められ、児童・生徒に教育活動を提供しなければならない。一方で校種にかかわらず、子どもの学びを保証する必要がある。特別な配慮を要する子ども達は、特別支援学校だけでなく、特別支援学級や通常学級にも在籍しており、日々対応する中でそれぞれの教師が悩みながら指導に当たっているのが現状である。中には、経験のない、あるいは経験の浅い教師が特別支援学級の担任を任されることもある。だからこそ、学校種を超えた専門性を共有する仕組みが求められる。特別支援学校のノウハウを特別支援学級や通常学級でも生かし、特別支援学級や通常学級での学級経営や集団指導のノウハウを特別支援学校でも生かすことが必要である。お互いの専門性を共有することで、困っている子ども達の一助となる価値ある取組を目指していくことが重要である。

以上の理由により、今年度は特別支援学校教師を対象に研究を進め、特別支援学級教師との比較から専門性の向上について考えていくことにした。

2. 研究の方法

山梨県内の知的障害特別支援学校、及び県外の特別支援学校において、質問紙調査を行った。その後、サポートシートを用いて指導実践を行なった。

3. 研究方法の詳細・結果・考察

(1) 質問紙調査

i. 目的

特別支援学校（知的）担任の実践上の課題を明らかにし、解決法の一つとして専門性向上パッケージ開発のための基礎資料とすることを目的とした。

ii. 調査対象

特別支援学校担任の教員。または、過去担任したことがある教員。

iii. 調査の状況や手続き

2021年5月11日～6月30日の間で、県内の特別支援学校（以下、K支援学校とする）と他校（県外含む）の知り合いに依頼した。その先生方に、質問項目を送り、紙面またはウェブで回答してもらい、回収した。合計38名より回答を得た。

iv. 調査項目の作成のための基礎資料

調査項目の作成に当たっては、千葉県総合教育センター 特別支援教育部（2015）の「特別支援学級担当者の専門性向上パッケージの開発に向けた質問紙調査」を参考とした。

アンケート項目については以下である。

v. アンケート項目

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ①回答者について ②学級経営について ③個別の指導計画について ④授業について ⑤関係者との連携について ⑥専門性について |
|--|

なお⑥については、専門性について現状把握するため、山梨県立かえで支援学校（2018）を参考に筆者が新たに追加した項目である。具体的な項目については次の6つからなる。

今年度は、より回答しやすくするために、一部選択肢式に変更した。

- 専門性 1：障害特性の理解
- 専門性 2：子ども理解
- 専門性 3：将来を見据えた指導計画を立てる
- 専門性 4：学級づくり・授業づくり
- 専門性 5：保護者や関係機関との連携
- 専門性 6：研修への意欲・向上心

vi. アンケート結果と考察

個別の指導計画の作成や活用に関して困っていることや課題は、「個別の指導計画に基づいた授業、指導・支援及び評価」が最も多かった。

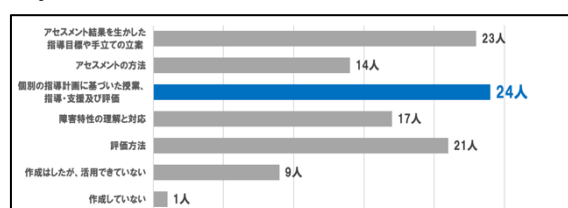


図2 個別の指導計画の作成や活用に関して困っていることや課題 (n=38)

授業づくりに関して困っていることは、「単元・題材計画の作成の仕方」が最も多かった。

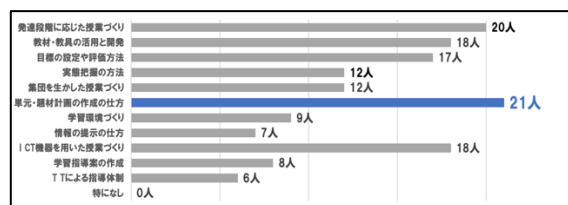


図3 授業づくりに関して困っていることや課題 (n=33)

困っていることや課題を解決するための方法は、「先輩や同僚に相談」が最も多かった。これは昨年度と同様の結果である。

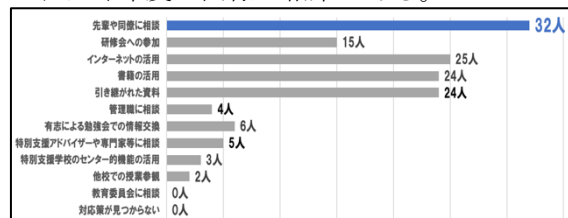


図4 困っていることや課題を解決するための方法 (n=36)

専門性については、4件法 (1:できない 2:

ややできない 3:ややできる 4:できる)により調査をした。

前述の専門性 1~6 の項目の中で、「専門性 3: 将来を見据えた指導計画を立てる」の項目に関して、半数以上が2 (ややできない) に回答していた。この項目については、昨年度も同様の結果であった。このことから、特別支援学校教諭という専門性がある程度高い教師でも、将来を見据えた指導計画に関しては、不安をもっていることがわかった。

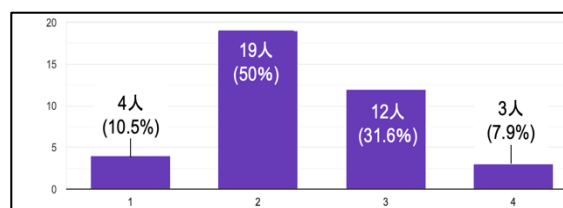


図5 専門性 3: 将来を見据えた指導計画を立てる (n=38)

専門性 4 における昨年度の特別支援学級教師による調査では、3、4 に回答する割合が高かったが、今年度の特別支援学校教師では、1、2 に回答する割合が高かった。このことから、特別支援学校では、複数担任による学級づくりや授業づくりが課題であることがわかった。

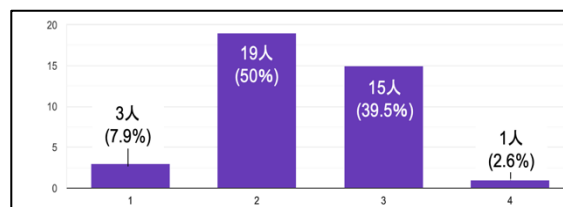


図6 専門性 4: 学級づくり・授業づくり (n=38)

図7は、AI テキストマイニング by ユーザーローカルを使用し、自由記述をまとめた結果である。



図7 専門性を高めるための対応策 (n=28)

以上のアンケート結果から、次の3点がキーワードとして浮かび上がった。

- ①将来を見据えた視点
- ②複数担任での学級（授業）づくり
- ③研修会

この3点を取り入れた指導実践をしていくことにした。

(2) 専門性向上パッケージの作成

i. 専門性向上パッケージ概要

筆者のこれまでの指導実践から、専門性向上に必要と思われる項目を6つにまとめ、専門性向上パッケージの内容とした。その概要は以下のとおりである。図8に示す。

- ①サポートブック（サポートシートを集めたもの）
- ②教材バンク
- ③デジタル教材
- ④QAシート
- ⑤研修パッケージ
- ⑥情報

今年度の研究でも、①サポートブックを構成するサポートシートを取り上げた。

ii. サポートシート

図9のようにサポートシートは、子どもの行動から背景を探り、よりよい支援、指導をするためのツールである。すぐに「How to」を求める思考ではなく、行動の背景を探る「Why」の視点を大切にすることをその特徴とする。また、応用行動分析の観点から子どもの行動の背景を探り、必要な指導や支援を行う。

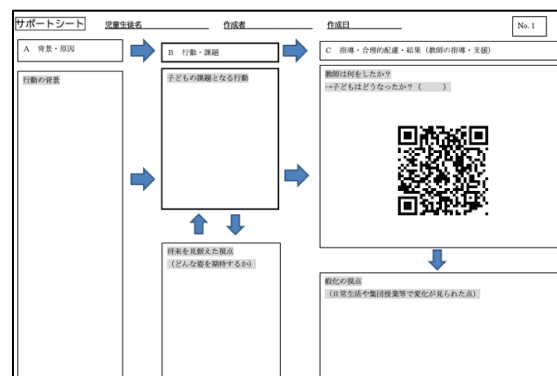


図9 サポートシート

サポートシートの記入例や記入の仕方については、筆者が動画で解説をしている。上記のQRコードを参照していただきたい。

①子どもの対応について知りたい。
②子どもの行動で困っていることがある。
③色々な実践例が知りたい。

①教材教具について知りたい。
②教材教具を自分で作ってみたい。
③教材教具を借りたい。

①ICT教育に興味がある。
②実際に、デジタル教材を使ってみてみたい。
③デジタル教材を作ってみたい。

①特別支援教育に関して知りたいことがある。
(おすすめ書籍、雑誌、教材、自立活動、ピアトレーニング、検査等)

①特別支援教育に関する勉強がしたい。
②校内研修でコンテンツを使いたい。
③自主研修で専門性を向上させたい。

①最近の教育情勢が知りたい。
②他県の特別支援教育に関する情報が知りたい。
③最新の教育実践が知りたい。

図8 専門性向上パッケージ概要

なお、サポートシートのポイントは、行動の背景を考える視点と将来を見据えた視点を取り入れたことである。行動の背景を考え、記入することで、子どもを多面的に実態把握することができる。また、行動の課題から将来を見据えた姿を考えて記入することで、系統性のある指導や支援を意識することもできる。

サポートシートはあくまでよりよい指導や支援をするためのツールであり、記入することが目的ではない。記入する中で、様々な課題となる行動の背景、及び指導、支援を探っていくことが大切となる。

(3) 指導実践

i. 使用対象クラスと対象者

K 支援学校 1 年生 6 名、及び担任 3 名 (I 教諭：特別支援学校担任 1 年目、F 教諭：特別支援学校担任 3 年目、筆者)

ii. 活用方法

第一段階として、筆者と同クラスの特別支援学校担任 (以下、I 教諭、F 教諭) に、筆者がサポートシートの見本を見せ、書き方等を説明した。

担任がまず子どもの行動の課題 (B 欄) を記入し、続いて考えられる背景 (A 欄) を複数記入する。行動の課題と合わせて、将来を見据えた視点 (3 年後に期待する姿) も記入した。

第二段階では、担任 2 名と筆者が話をし、子どもの課題に対する指導、支援の実際を複数考え、記入した (C 欄)。そして、実践後、指導、支援に対しての子どもの反応を書いた。効果の有無を記入することで、指導、支援の検証を行った。なお、この検証については、週一回 15 分程度のクラス会議を設けて行った。

第三段階として、指導、支援の結果から般化 (日常生活や他授業で変化が見られた点) の視点を記入した。さらに、複数回実践や話し合いをすることで、より多くの課題の背景 (A 欄) と指導、支援方法 (C 欄) を追記することができた。それらをまとめたものが図 10 である。

iii. 結果と考察

第一段階の記入を 5 月に、第二段階、第三段階は週一回のクラス会議にて継続的に話をしながら記入した。

サポートシート		児童生徒名	A	作成者	武井恒 F 教諭、I 教諭	作成日	2021/05/28 6/17 10/26	No. 1
A 背景 行動の背景 ①途中で止められるのが嫌。 ②自分のタイミングで終わりたい。 ③止められ方が気に入らない。(教師の言動、かかわり方) ④頭を叩いたり、ものを投げたりすることで、周りに注目をしてほしい。 ⑤頭を叩いたり、ものを投げたりすることで、気持ちを発散している。 ⑥音をならせたい。	B 課題 子どもの課題となる行動 行動を途中で止められると、自分の頭を叩いたり、ものを投げたりする。 将来を見据えた視点 (どんな姿を期待するか) 自分なりに折り合いをつけて行動や気持ちを切り替える。	C 指導・支援と結果		第二段階				
		教師は何をしたか? →子どもはどうなったか? () ①とことん飽きるまでやらせる。 →納得いくタイミングがある。タイミングよく終わりにすると、終わることができた。(○) ②タイムタイマーを使い、終わるタイミングを知らせる。 →注目し、待つことは難しい。待つといいことがあるようにもしたい。(○) ③違う活動を提案して、切り替えさせる。 →投げつけてしまっ、切り替えは難しい。(△) ④叩く、投げる代わりに行動を伝える。例) 頭ではなく、手をパンパンする、投げるのではなく、握るなど。 →手をパンパンは何度かできたが、相変わらず頭は叩く。(△) ⑤不安定になってしまったら、とけあい動作法(頭や肩への圧迫刺激)を行う。 →肩への圧迫刺激は逆効果。くすぐったい感じ。頭への圧迫刺激は多少落ち着いていた。(○) ⑥不安定になってしまったら、タオルやマットをかぶせる。(視界を遮る。) →タオルをかぶせて側頭部へ圧迫刺激をすることで、多少落ちついた。(○) ⑦外に出てクールダウンをする。 →校内一周、音楽室、図書室で過ごす落ち着くこともある。(○)		第三段階				
		般化の視点 (日常生活や集団授業等で変化が見られた点) ①言葉で「やめてよ」「ごめんね」など言えるようになった。 ②自らの意思で活動を終えることができるようになった。						

図 10 サポートシート記入段階

実際の指導は、クラス担任3名でのチームティーチングにて行った。課題から背景を考える中で、複数の指導、支援方法を導き出した。その中から、優先順位をつけて一つ一つ取り組んだ結果、子どもの変容が見られた。

例えば、行動の課題としてA児の「行動を途中で止められると、自分の頭を叩いたり、ものを投げたりする」が挙げられた。A児は、知的障害を伴う自閉症と診断されている。発語は限られていて、コミュニケーションに課題がある。しかし、自分の興味のあるものや活動では集中力を発揮し、継続して取り組むことができる。それゆえに、途中で止められると上記のような課題となる行動が見られる。注意深く観察し、担任間で話をする中で、行動の背景として、「自分のタイミングで終わりたい、止められ方が気に入らない」などが挙げられた。合わせて記入した将来を見据えた視点は、「自分なりに折り合いをつけて行動や気持ちを切り替える」である。つまり、行動や気持ちのコントロールができることを目指している。そこで、筆者と担任2名で指導、支援の内容を複数考え、サポートシートに記入した。例えば、「とことん飽きるまでやらせる、終わるタイミングを知らせる」などである。それぞれ、実践する中でA児の行動が変わっていった。特に効果的だったのは、「終わるタイミングを知らせる」支援である。A児にとって、課題となる行動の背景の一つに「止められ方が気に入らない」ことが考えられた。そこで止めるタイミングを視覚的に提示するために、タイムタイマーを用いた。最初は、タイマーの意味が分からず、見向きもしなかった。しかし、継続して使用し続けることで、時間を量として意識できるようになった。2学期が終わる頃には、タイマーの残り時間を見て終わりが近づくと、自ら今行っている活動を止めることができるようになった。自分で終わりを意識できるようになったことで、自分の頭を叩いたり、ものを投げたりする行動は激減した。

A児以外の児童にも、同じようにサポートシートを用いて実態把握をし、指導、支援を行っ

てきた。もちろん、効果が見られなかった取り組みもあったが、行動の背景と指導、支援の取り組みを複数考えられたことで、担任間の子どもへの関わり方が多面的になった。

本研究の成果の一つとして、取り組んだ17事例のサポートシートをまとめてサポートブックを作成した。その目次が図11である。

日常生活		
事例番号	作成者	課題
1	武井	行動を途中で止められると、自分の頭を叩いたり、ものを投げたりする。
2	武井	給食を食べることができない。
3	武井	順番が1番でない、イライラして友達に手を出す。
4	武井	ものや手で壁を叩く。
5	武井	真似することが難しい。(ダンスなど)
6	I教諭	ものを投げる。(本や水筒など)
7	I教諭	課題に取り組むのに、こうしてほしいなどのこちらの意思が伝わらない。
8	I教諭	トイレに誘っても行きたくない。
9	I教諭	マスクをしない。
10	I教諭	柵や机の上に乗る。
11	F教諭	トイレに行っても出ないことが多い。
12	F教諭	トイレに行く途中で寄り道してしまう。
13	F教諭	急に情緒不安定になる。(泣く、だっこをせがむ)
14	I教諭	トイレの後、手洗いを拒む。
15	F教諭	生殖器を触ったり、出したりする。
16	武井	着席できない。
17	F教諭	マスクを嫌がる。

図11 サポートブック目次

一つのサポートシートが同じような行動の課題のある子どもに、そのまま活用できるわけではない。しかし、指導や支援を考える一助になるのではないかと考える。特別支援を要する子どもたちに対応するとき、経験が浅ければ不安となる。だからこそ、サポートシートがそのような子どもたちへの関わり方のヒントになると良い。そのためには、多種多様な事例が必要である。ある子どもにうまくいかなかった指導、支援も別の子どもにはうまくいくかもしれない。

昨年度は、特別支援学級にて16事例を集めることができた。今後も事例を複数集めていく中で質と量を高め、サポートシートの充実を図っていく。

4. 本年度の研究成果と今後の課題

(1) サポートシートの比較

昨年度のサポートシートの課題点として、挙げられたのが以下の点である。

A欄の「背景・原因」が、自分の力では、把握できないところがある。

特別支援学級担任が1名だったため、複数の視点で考えることが難しかった。

今年度の特別支援学校では、特別支援学級と異なる点は多々ある。その一つがチームテ

ィーティングである。そのため、昨年度のサポートシートと比べると、改善できている点が多くつかある。例えば、次の3点である。

- ①複数人で複数回実践できている。
- ②うまくいかなかった指導、支援を改め、うまくいった指導、支援を共有できている。
- ③将来を見据えた視点を意識している。

次の成果と課題の中で詳しく述べる。

(2) サポートシートの成果と課題

K支援学校担任2名に、サポートシートについての感想や意見を、紙面アンケートにて回答してもらった。

i. サポートシートの良いと思った（書きやすかった）点など

- ①自分の考えが整理され、何が課題なのか明確になった。
- ②支援方法について共通理解が図られ、児童支援がしやすくなった。
- ③後で何度も見返すことができるのはとても良いと思った。(I教諭)

- ①箇条書きで良いので、すぐに書けた。
- ②他の先生の話から、自分には気づけなかった背景を考えることができよかった。
- ③子どもの課題の背景を考えることができた。(F教諭)

両者に共通することは複数人で取り組むメリットである。例えば、I教諭は「支援方法について共通理解が図られ、児童支援がしやすくなった。」とある。F教諭は「他の先生の話も聞くと、自分には気づけなかった背景を考えることができよかった。」とある。どちらも複数人で子どもの姿を捉え、複数回実践してきた結果であると思われる。

ii. サポートシートの書きにくかった（書くときに迷った）点

課題となることが何なのかわからない。本当にこの課題でいいのか迷う。(I教諭)

I教諭の意見からは、将来を見据えた視点と課題を相互に関連させ、本当に必要な課題を捉え直す必要性が考えられる。将来を見据えた視点は、昨年もキーワードとして挙げられた。課題を考える際、将来を見据えた視点も合わせて考えていく必要性が示唆された。

対して、F教諭は「特になかった。」という

回答である。これは複数人で、背景(A欄)や指導・支援(C欄)を考えられるため、特に困ることはなかったということが理由である。

iii. サポートシートの感想

書く前は難しそうだと感じたが、書き始めると意外と簡単に書けた。(I教諭)
将来を見据えた視点があることで、子どもたちの将来の姿を考えられ、嬉しくなった。(F教諭)

サポートシートが子ども理解と指導に取り組む意欲につながったことが示された。初めてサポートシートを使う教員が、スムーズに取り組めるようにするには、サポートシートの使い方動画の活用や研修会等の機会をつくるのが大切だと考える。

iv. 特別支援学校でのサポートシート作成の利点

以上のことから、特別支援学校でのサポートシート作成の利点は次の3点になる。

- ①複数人で記入、検討ができる。(複数回)
- ②複数人で指導、支援ができる。(複数回)
- ③般化(日常生活で生かす)の視点を意識できる。

(3) 本年度の研究成果と課題

i. 成果

本年度の研究成果は次の3点である。


- ①複数人によるサポートシート記入及び検討により、児童のアセスメント(実態把握)が丁寧にできた。
- ②将来を見据えた視点や般化の視点を考え、指導、支援ができた。
- ③研修会を通して、サポートシートを広めることができた。

本年度は、筆者とクラス担任2名の合計3名の教師でサポートシートを作成することができた。前述したように、複数で取り組むことで行動の背景や指導、支援を多面的に考えることができた。また、同じ支援方法を複数の教師で共有することで、児童のアセスメントを丁寧に行うことができた。複数の視点で考えると、今まで見えてこなかった面も話題となり、子どもを多面的に把握することができる。複数の視点で実態把握をすることは今後も大切なキーワードとなる。

また教員同士で話をする中で、将来の視点から課題を再検討することもあった。反対に、課題から将来を見据えた姿を想像することで、系統的な指導を心がけるきっかけにもなった。

さらに、般化の視点を意識した指導、支援を行った。特別支援学校では、日常生活を生かす視点を大切にしている。そのため、特定の場面で学んだことを他の場面でも生かそうとする姿勢を大切にす。知識が断片的になりやすい児童生徒にとって、般化の視点を意識した指導、支援は大切だと考える。

サポートシートは作ることが目的ではない。どう活用していくかが何より大切である。そのため、サポートシートを広めていく必要がある。そこで、本年度は勤務校にて有志による研修会を開催した。概要は次のとおりである。

- | | |
|-----------------------------|--|
| ①夏休みに2回、冬休みに2回開催 |  |
| ②参加者はのべ26名
(多くが3年目までの教員) | |
| ③サポートシートを中心に事例検討 | |

研修会を通して、研究対象であるクラス担任以外の教師にもサポートシートの使い方、有用性などを伝えることができた。詳しい報告については、上記のQRコードを参照していただきたい。

さらに、勤務校以外での有志研修会として、2020年3月に山梨自立活動研究会を発足した。現在25名の会員(小学校教諭、特別支援学校教諭、ST、OT)がおり、月一回サポートシートを使用した事例検討を実施している。

ii. 課題

本年度の研究の課題は次の3点である。

- | |
|---------------------------|
| ①サポートシートを充実させる(質と量各障害種など) |
| ②サポートシートを広める(研修会) |
| ③専門性向上パッケージの充実(更新) |

本研究の対象の障害種は知的障害のみである。障害種が変われば、行動の課題及び背景も変わる。それに伴い、必然的に指導、支援も変わる。今後は、対象を知的障害に限らず、肢体不自由や発達障害等にも広げていく。

サポートシートを広めていくために、研修会も開催していく。より多くの方にサポート

シートの理念や使い方を伝え、実践してもらう中で有効性を検討することが求められる。

専門性向上パッケージは、サポートシートだけではない。他の項目も充実させ、最終的には専門性向上パッケージを総合的に活用することで、個々の専門性の向上と共に、組織として専門性を担保していく仕組みを作っていくことを目標とする。

iii. 今後

本研究は、2年計画で取り組んだ。2年間の取組を通して、特別支援学級や特別支援学校における課題や成果を得ることができた。研究はここで一区切りになるが、今後も継続して研究に取り組むことで、より良いパッケージの作成を目指していく。

いずれ、県内の特別支援学級、特別支援学校に専門性向上パッケージを配布することで、学校種を超えた専門性の向上と担保を目指していきたいと考えている。本研究に興味のある方は、ぜひご連絡をいただきたい。今回の研究成果であるサポートシートの共有と研究の詳細をお伝えする予定である。

武井恒 hisashi212@ybb.ne.jp

引用文献

- 竹林地毅(2014) 小学校特別支援学級担任の専門性向上に関する調査. 特別支援教育実践センター研究紀要. 12. 75-82.
- 千葉県総合教育センター特別支援教育部(2015) 特別支援学級担当者の専門性向上パッケージの開発に向けた質問紙調査.
- 日野久美子・井邑 智哉・納富 恵子・中山 健(2019) 教員の特別支援教育に関する専門性の資質・能力についての分類-専門性の高い教員を対象とした調査から-. 佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要. 3. 92-97.
- 文部科学省(2019年9月25日) 日本の特別支援教育の現状について. 新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議.
- 文部科学省(2021) 『令和の日本型学校教育』の構築を目指して~全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現~(答申)(中教審第228号)
- 山梨県教育委員会(2021) 令和3年度山梨の特別支援教育.
- 山梨県教育委員会(2020) やまなし特別支援教育推進プラン2020.
- 山梨県立かえで支援学校(2018) 教師の専門性を向上し、担保するための実践的研究. 山梨県立かえで支援学校平成30年度研究紀要.